

イシグロ『上海の伯爵夫人』における日本人像

林 淑丹

二〇一七年にノーベル文学賞を受賞したカズオ・イシグロ (Kazuo Ishiguro、1954-) は、小説のみならず、映画の脚本も手掛けている。『上海の伯爵夫人』(*The White Countess*、2005) は、イシグロによるオリジナル脚本で作られた映画で、日中戦争開戦前の激動期の上海を舞台にしている。列強各国が謀略をめぐらす混乱した政局を背景に、イシグロはマツダという謎めいた日本人を登場させている。マツダは映画の中心人物のひとりであり、神出鬼没であるにもかかわらず、彼の身分は明かされていない。

イシグロの初期作品のほとんどは、日本を舞台としたもので占められている。筆者はこれまで初期作品における「日本的」な要素を探ってきた。一方、『上海の伯爵夫人』のように、国際関係のなかの日本のイメージについては論じてこなかった。一九三〇年代の上海で、世界各国が権謀術数を駆使し、国際的な政治権力を獲得しようとしているなかで、日中、および日米の複雑な関係が、いかにしてマツダやそのほかの人物を通して描出されたか。またそうしたイメージが、イシグロの「日本」への関心とどう関連するのか。本稿では、これらの問いを手掛かりとして、『上海の伯爵夫人』における日本人像を追究したい。

イシグロ『上海の伯爵夫人』における日本人像

林 淑丹

一、はじめに

二〇一七年にノーベル文学賞を受賞したカズオ・イシグロ (Kazuo Ishiguro, 1954-) は、小説のみならず、映画の脚本も手掛けている。『上海の伯爵夫人』(The White Countess, 2005) は、イシグロによるオリジナル脚本で作られた映画で、日中戦争開戦前の激動期の上海を舞台にしている。列強各国が謀略をめぐらす混乱した政局を背景に、イシグロはマツダという謎めいた日本人を登場させている。マツダは映画の中心人物のひとりであり、神出鬼没であるにもかかわらず、彼の身分は明かされていない。

本作品では、このマツダ役を、日本人俳優である真田広之に演じさせている。この映画は、日本人や日本軍に関する描写が、中国人の制作した日中戦争に関連する多数の映画とは異なっている。本稿では、イシグロが、こうした時代背景における日本人像、ないし日本軍像をいかにして描出したのか、という問題意識から研究を進めたい。

イシグロの初期作品のほとんどは、日本を舞台としたもので占められている。筆者はこれまで『遠い山なみの光』における「日本的」な要素を探ってきた¹。一方、『上海の伯爵夫人』のように、国際関係のなかの日本のイメージについては論じてこなかった。一九三〇年代の上海で、世界各国が権謀術数を駆使し、国際的な政治権力を獲得しようとしているなかで、日中、および日米の複雑な関係が、いかにしてマツダやそのほかの人物を通して描出されたか。またそうしたイメージが、イシグロの「日本」への関心とどう関連するのか。本稿では、これらの問いを手掛かりとして、『上海の伯爵夫人』における日本人像を追究したい。

二、トポスとしてのバー

映画の監督はかつてイシグロの前作『日の名残り』を映画化したジェームズ・アイヴォリーである。この映画は三人の人物が絡み合う。家族と視力を奪われたアメリカの元外交官トッド・ジャクソン、ロシアからの亡命貴族たる未亡人の伯爵夫人ソフィア、そして有力者らしいが最後まで正体不明の日本人のマツダである。ここでは、とりわけジャクソンとマツダとの関係に着目したい。

1936年の上海で、元外交官のアメリカ人ジャクソンは、祖国から亡命しロシア貴族のソフィアとクラブで知り合う。ソフィアは一族のためにクラブでホステスとして働いていた。ジャクソンはソフィアを気に入り、「白い伯爵夫人」と名付けた、自分の夢のバーへ彼女を引き抜く。一方でマツダは、ジャクソンのバーを理想の世界にするために協力する。しかし、その後日中戦争が勃発し、ジャクソンとソフィアは先の見えない亡命の旅に発つ。

¹ 林淑丹「浮遊する記憶の深淵——カズオ・イシグロ『遠い山なみの光』」(台湾大学日本語文学系『台大日本語文研究』41、2021年6月、pp. 1-20)

『上海の伯爵夫人』に関する評論は、これまでいくつか見られたものの、作品の世界を追究する論考はまだ少ない²。しかし本作品は、たんにジャクソンとソフィアのロマンスだけを描いた映画ではない。なかでも重要な焦点のひとつとなっているのは、マツダという日本人である。この映画に登場する日本人は、マツダを除けば、いくつかの場面で映される日本軍人のみである。イングロはなぜ、マツダという日本人役を加えたのであろうか。真田広之によって演じられたマツダの身分は最後まで明かされていない。彼は利巧でつねに冷静沉着で、上海のもっとも権力のある人を動かす影響力をもつ有力者である、という設定である。こうした日本人の形象は、これまで日中戦争を描いた中国映画の多くで描かれてきた、冷血で凶暴な日本人像のそれとは異なっている。

さらに日本軍の描写に関しても同様に、中国の抗日映画でよく描かれる、残虐な暴力をふるったあげく大規模攻撃を受けて爆発し、死傷者多数の惨状を晒すようなものではない。日本軍が画面に登場するのは映画の終盤であり、日本軍があたかも上海の所有者であるかのように街を巡視し、住民の動きを監視する緊張した雰囲気描かれた。要するに、物語の焦点は日本軍自体にはなく、亡命する人込みの混乱状態に当てられているのである。マツダの存在は物語の核心に迫っており、日中戦争における日本をイメージする人物として示唆される。したがって、マツダという配役を取り込むことによって、『上海の伯爵夫人』は、イングロが思索している日中戦争、さらには二次世界大戦での日本の役目が露わになった映画だと言えよう。

ジャクソンとマツダとの面会場所は、二回目の競馬場のシーンを除き、すべてバーである。では、バーはこの映画でいかなる意味をもっているのであろうか。そして、なぜジャクソンは、上海で理想的なバーを開こうとしているのであろうか。ジャクソンは、かつてベルサイユ条約の調印にも立ち会ったアメリカの外交官であった。家族と視力をなくしてから、彼は「夢のバー」を開き、ソフィアを店の華として招き入れる。友人のトーマスがこのバーの実質的な意義とその美しさを理解していないと、ジャクソンは考えている。では、ジャクソンにとってバーの「美」とは何か。

戦争が勃発する直前、上海の町は危険な状態に陥る。客が来ないと分かっているにもかかわらず、彼はためらわずバーに向かう。ジャクソンは、外の世界が欺瞞に満ちた偽りの世界であるのに対して、自分のバーこそが愉悦を見出せる場所だと考えている。ジャクソンにとって、このバーの実質的な意義とは、誰でも心を休めることができる、歓楽のトポスなのであろう。このように、ジャクソンは自分のバーを借りて、外部の虚偽、陰険な世界から遮断された、自らの内部の閉鎖的な世界を作り上げた。そうした閉鎖的な世界は、一見ユートピアのようであるが、ソフィアから見れば、バーの「扉はもろ」く、彼女は先の見えない不安に襲われる。とは言え、この「白い伯爵夫人」と名付けられたバーは、ジャクソンとマツダ、そしてジャクソンとソフィアに関連性を持たせる重要なトポスでもあるのである。さらに広く言えば、アメリカ、日本、ロシアや中国など、世界各国の政治的関係を連動させるトポスともなっているのである。

² 菅見のかぎり、岩田託子による「映像にイングロはなにを見るか」(『カズオ・イングロの世界』水声社、2017. 12、pp. 163-181)、加藤めぐみによる「ヘリテージ映画としての『上海の伯爵夫人』」(都留文科大学英文学会『英語英文学論集』46、2018、pp. 240-262)のみである。

一方、ジャクソンの構築したバーは、マツダにとって自分の任務を忘れて安心できる場所である。彼はジャクソンに協働して、理想的な世界を作り上げながらも、他方でジャクソンの知らない、より大きいキャンパスの世界を練り上げていく。マツダにとっては、ジャクソンのバーで成すことと、中国出撃という計画とは矛盾しない。ところで、マツダがはじめて登場したのは、外国人の集まるナイトクラブであった。そこにはピエロのようなかっこうをした白人の歌手がいて、見事な歌唱力を見せる。画面から、マツダがその芸人を大いに気に入っていることがわかる。

マツダは中国の各地で自由自在に移動し、国際情勢に関するすべての状況を把握している。彼の才能と姿勢は、まさしく彼自身がかつてジャクソンに語った、中国で見るべき、すべてを見る必要があるということの実践だと言える。彼は、上海のもっとも権力のある人を動かす影響力をもつと漏らし、激変した政局で各国の権力者を周旋している。マツダは、彼の好きなバーのピエロと同様、人前で抜群の演技をしながら、正体を隠しているのではないか。彼と各国の大物達との交際には裏があり、真実と欺瞞の境界は曖昧模糊である。作品では、最後に任務を達成するために、道化師のように偽装して、中国人、アメリカ人を含む外国人を操る彼の姿が示唆される。

このように、マツダという配役に着目すれば、この映画は日本人観衆を強く意識していることがわかる。バーは映画の物語世界を読み取れる重要な場所であり、日本、アメリカ、中国やロシアの政治、文化、生活を連関させる重要なトポスとなっているのである。

三、敵か友か——日米同盟の同床異夢

映画では、登場人物の設定そのものが、当時の国際情勢が巧みにあてはまるように表現されている。ジャクソンはアメリカ人で、しかも元外交官である。彼は諸外国と交渉し外国と良い関係を維持できるよう務める。だが、彼は自分のバーを、歓楽を尽くす場所に作り上げながら、「政治的な緊張感」が欠けていると考える。国民党員を誘いながら、国民党を嫌う共産党や日本人にも来てもらいたいと望む。マツダは彼の理想に協力した。ジャクソンは、当時の中国および世界各国の権謀術数を駆使し、無秩序な激動の政局を、理想のバーにも反照させた。彼は上海の政治的な騒乱や駆け引きと、愉楽の要素を調和して、理想のバーに集約できたのである。彼がこう考えるようになったのは、自ら不合理な暴力によって、家族と視力を失ったためでもあろう。広い意味では、こうした思慮は、アメリカの平和主義的な思考の反復だと考えられる。しかしむろん、『上海の伯爵夫人』のなかでは、トーマスとその関連企業のように、マツダを強く警戒するアメリカ人もいた。彼らは結局、日本人の軍国主義的な行為を敬遠しているのである。

一方、マツダはベルサイユ条約のように、世界強国の首脳が未来の創造について省察する、ということに憧れている。彼はジャクソンに、日本がイギリス、フランス、アメリカのような強国になってほしいと語っている。ジャクソンに黙って中国で戦争を引き起こすことは、彼自身の練りあげた大きな「キャンパス」である。ここから、二人の思案と目標が乖離していくことがわかる。最後に二人が決裂する際、マツダは、ジャクソンとの付き合いは「人生の貴重なひととき」であり、一緒に「美しいものを作り上げた」と言い表した。

マツダのいう「美しいもの」とは、元外交官であるジャクソンの政治性に関与したことを指しているであろう。それは、マツダの理想である、日本が欧米列強と立ち並ぶことでもある。そして、それを「作り上げた」というのは、マツダがジャクソンと一緒に日米の同盟を作り上げることができたということを暗示しているであろう。しかし、マツダが作り上げたものはジャクソンのバーと関係がない。マツダが練りあげた企画は、中国出兵であった。日本が中国で行った軍国主義的な行為は、マツダの言い分では、日本が西欧列強と比肩するためであり、西欧列強と一緒に未来を創るためなのである。最後にマツダの救助を完全と拒否したのは、マツダの考えに賛同できなかったからであろう。当時の日本とアメリカとの関わりは、友でありながら敵でもある、あるいはそのどちらでもない、という危うい関係であった。マツダとジャクソンの友情は日米関係の隠喩であり、最後の二人の決裂は、日米同盟の神話の崩壊を予期させるものだったのではないだろうか。

このように、マツダのこうした使命感とミッションから、彼が日中戦争を聖戦のように見なしていることが察せられる。彼は日本の中国出兵を西洋列強におよぶ国力を表わすための行動だと捉え、日本の行為を神聖化した。中国に打ち勝つことより、国際秩序における日本の地位が再編成できる、というのが彼の認識なのである。

マツダの最後のふるまいは注目に値する。開戦の直前、彼は慎重で荘厳な面様で、高い建物から緩やかに上海の街を見下ろす。すべてが計画どおりに進行し、準備万端整っている確信する彼の表情がクローズアップされる。その姿は聖なる任務を迎える聖職者のようである。しかしなぜ、この場面で、日本人を代表するマツダが高所から上海の街を見下ろすシーンが挿入されたのか。それはおそらく、中国を見下ろしていた当時の日本のメタファーでもあろう。

マツダの憧れた、世界列強と共に「未来を創る」という行為は、結局、中国を犠牲にすることでしか成立しない。にもかかわらず、彼は聖職者のように日中戦争を迎える。マツダは、日本人が欧米列強と未来を創るという大きいキャンバスを描きながら、軍国主義を正当化したのではないか。日本の軍国主義への傾倒は、西欧列強の国々に見下ろされないためだと考えられてきた。しかし、イングロは『上海の伯爵夫人』で、日本が西欧列強と肩を並べるための聖なる使命から戦争を引き起こしたことにした。しかも支配者のように勝利をおさめるような姿勢で、日本の軍事行動を自己弁護のように創り上げ、語り直したのである。

四、結語

『上海の伯爵夫人』では、マツダという人物をかりて、冷静沈着で賢く、謎めいた日本人像が提示された。彼の任務達成によって、日本は国際舞台でアメリカやフランスに匹敵する地位まで昇った。この脚本でイメージされている日本人像は、イングロの初期の作品に表わされているジャパニーズネスとは異なる。イングロが『上海の伯爵夫人』で追究しているのは、むしろ国際舞台における日本の役目と責任であろう。とりわけ、第二次大戦後の日本の国際責任である。さらに、マツダの聖職者という形象から、戦争を神聖化した日本の帝国主義を暗に批判しているのではないだろうか。